

群 教 セ	G11 - 02
	平18.235集

人間関係形成能力をはぐくむための 指導の工夫

— 自他のよさに気付かせる活動を通して —

特別研修員 堀口 利文 (伊勢崎市立あずま南小学校)

《研究の概要》

本研究は、小学3年生を対象にキャリア教育を推進したものである。特に人間関係形成能力の育成を目指し、人とのかかわりの多い総合的な学習の時間の中で実践した。具体的には、ポートフォリオを作成し、それを教室に常時掲示することで、児童が自由にコメントを書き込むことができるようにした。こうした自他のよさに気付かせる活動を通して、積極的に人とかかわろうとする態度が育成されることを明らかにしたものである。

I 主題設定の理由

小・中・高校のキャリア教育については、進路指導と重なる部分が多いことから、一般的に中・高でのキャリア教育が主になるのではないかという認識が高い。また、キャリア教育を進路選択能力の育成という面からみた場合においては、自分がやりたいことや自分に向いていることなど、自分の個性を認識することが第一歩であるといえるが、この個性の認識こそ進路選択のみならず、人間関係を形成していく上でも重要な要素である。つまり、自分の個性を認識することが他人の個性を理解する上で重要だといえる。だからこそIT社会といわれる人間関係が希薄になってきた現代において、キャリア教育が掲げている「人間関係形成能力」の育成はとても大切なものだと言える。

そのような視点でキャリア教育をとらえると、自分の個性を認識する過程にある小学校段階でのキャリア教育の重要性に気付くことができる。小学生の発達心理では、4年生までの「何でもできる」自己万能感から、5年生以後は様々な体験を通して、できること・できないことの区別ができるようになってくる年代であるといわれている。従って小学校時代には、多くの体験活動を通して、児童にできること・できないことを認識できるよう支援していくことや、その過程において自分のよさを実感させるような配慮をしながら、自分の個性を正しく認識できるようにすることが必要となってくる。

本研究では、体験活動を柱とする総合的な学習の時間において、友達とのかかわりを通して自分

のよさや友達のよさに気付かせることを通して、人間関係形成能力をはぐくむことをねらいとしている。自分のよさに気付くために、自分がその時その時でどのように感じたかをはっきりさせておく必要がある。そこでポートフォリオを利用するが、このポートフォリオを教室背面に常時掲示しておくことによって、児童が活動を振り返りやすくなるとともに、友達の考えを知る場を提供できるようにする。さらに、友達のポートフォリオによさをコメントしたり、自分のポートフォリオと比べる活動を取り入れることで、自分のよさが意識化されると考える。友達とのかかわりの中で自他のよさに気付いていくことは、キャリア教育の「人間関係形成能力」の向上につながり、小学3年生が自分の個性を認識する上で重要なことであると考えられる。これらが中・高校の進路選択において個性の認識へと発展していく土台になるものと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

教室背面に学びの足跡であるポートフォリオを掲示し、そこに児童が自由にコメントを書くように指導することで、友達のよさの見方が培われると同時に、見てもらう自分を意識できるようになり、積極的に人とかかわろうとする態度を育成することができることを明らかにする。

III 研究の見通し

1 単元の指導段階(導入、事前学習、見学、まとめ)にそって、それぞれ気付きや感想をカードに書かせることで、自分の考えを深めることができるであろう。

2 作成したカードを教室背面に掲示しておき、互いの内容のよさに目を向け伝え合う活動を取り入れれば、友達の見方やとらえ方を広げることができるであろう。

3 単元の最後にポートフォリオの記述内容や友達からもらった意見に目を向けさせることにより、自分では気付かなかった自分のよさに気付くことができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 人間関係形成能力について

キャリア教育における人間関係形成能力は、自他の理解能力・コミュニケーション能力に分類される。本研究では、小学3年生という発達段階を考え、友達や自分のよさに気付いたり、それらを相手に伝えたりする力を育成していく。

(2) 小学3年生の自己認識について

「他者(友達)よりもできるようになりたい」という達成欲求が旺盛であるが、相対的に判断される機会も多く、できること・できないことを意識し始める時期である。しかし、周りから「やればできる」といわれ、「嫌いなことはしないけど、やれば何でもできるんだ」という感覚も併せ持っている時期でもある。

(3) カードを使用したポートフォリオについて

単元の中で重点的な活動を抽出し、学んだことや感想をカードに文章で記入する。そのカードは教室の背面に掲示するが、ばらばらに掲示するのではなく、次に自分が書いたカードを隣に貼っていけるようにスペースを確保しておく。

(4) 検証計画

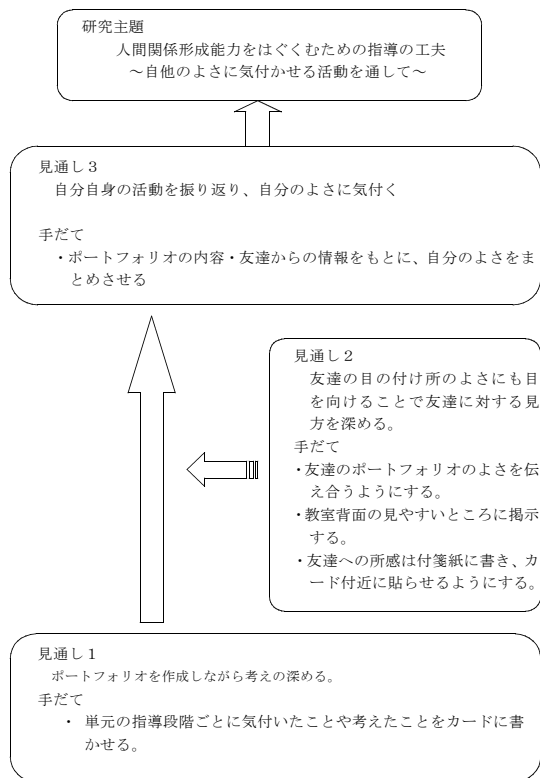
検証にあたっては、ポートフォリオへの記述内容の変化や児童の振り返りの様子、友達と伝え合う活動への取組の様子などの分析を通して、学級全体の変容としてとらえていく。

また、抽出児童Aについては、活動の様子の把握と分析によって検証していく。

抽出児童A

友達とかかわりを持つことが苦手であり、自分のいいたいこと・やりたいことが最優先になってしまう傾向のある児童

(5) 全体構想図



2 実践の概要及び結果の考察

(1) 本研究で作成するポートフォリオについて

本研究では体験活動後の印象を記述したカードによるポートフォリオを作成して進めていくが、このポートフォリオ作成にあたっては、次の点について留意した。

①総合的な学習の時間とカード作成時期について

資料1 学習活動とカード作成時期

単元名 「市場の仕事」 ねらい・自分たちのまわりには、いろいろな仕事・役割があることを発見することができる ・調べてわかったことや自分の考えをまとめ、発表することができる
・市場ではどんな仕事があるか予想する カード1

- ・市場の仕事について調べる計画を立てる
カード2
- ・市場に行き、市場の仕事の実際を見学する
カード3
- ・事前に調べたことや見学に行き明らかな
なったことについてまとめる
カード4

本単元においては、4枚のカードを記入する。それぞれのカードについて、次の内容を記入させる計画を立てた

カード1 ・ ・ 市場の仕事の内容についてどれくらい知っているか

カード2 ・ ・ 市場見学で、どんなことを調べてみたいか

カード3 ・ ・ 本単元の中心活動である体験活動を通して調べたこと

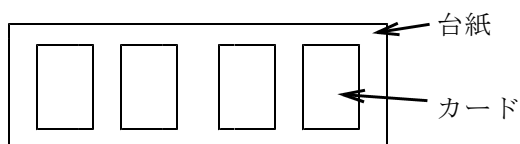
カード4 ・ ・ まとめる活動を行う中で明らかになった一番伝えたいこと

カード1～3では、児童がその職業に関する認識の深まりをとらえやすくし、カード4では、単元のまとめをさせた。

②ポートフォリオの形状について

細長い画用紙を台紙にして、4枚のカードを横並びで貼れるようにする。

一人分のポートフォリオ



(2) 実践内容

①単元の指導段階にそって、それぞれ気付きや感想をカードに書かせることで、児童は考えを深めることができたか(見通し1)

ア 実践の概要

教室の背面に35名分のカードを貼る(1人につき4枚)ことを考え、1枚のカードは、縦7.2cm横10.2cmの大きさ(A7)で作成した。その大きさでは、児童が書くことのできる量としては、2～3文程度である。従って、カードへ記入する際には、記入の内容例を示しながら説明した。

イ 結果と考察

資料2から、児童の予想は食品の管理に関するもの、食品の売買に関するもの、食品の運搬に関するものと大きく3つに分けられることが分かる。ここで、その仲間分けについて授業で扱い、ただ単に市場の仕事といっても、いくつかのパートに分かれているのではないかという学級全体の予想をもつことができた。その後、付箋紙貼りへと移った。

資料2

児童の記述について(抜粋)	
カ ド 1	・外国の食べ物も運ばれてくる
	・食品をチェックしている
	・食品をバックに詰めたり袋に入れたりしている
	・届けたものを倉庫に入れる
	・品物を注文に来る人がいる
	・野菜を作っている
	・野菜をきれいにしている
	・大きさ、重さなどを揃えて束にしている
	・スーパーなどに送り出す人がいる
	・食品の値段を決めている
・送られてきた食品が腐らないように管理している	

カード1で行った予想を基にして、見学のための計画を立て、「一番調べてきてみたいこと」という条件で書かせた結果、資料3から児童は事前に仲間わけの授業を行っているので、

ア 市場での仕事の内容

イ 市場の中にあるもの

ウ 市場で扱っているもの

と大体3つの分類ができた。

資料3

児童の記述について(抜粋)	
カ ド 2	・どんな仕事をしているか
	・箱づめをしている人の様子
	・お金を決めている人の様子
	・どんな物が売られているか
	・どんな機械がおいてあるか
	・どんな風に食品を管理しているか
	・どのくらいの人数で働いているのか
	・市場はどのくらい広いのか
	・バックヤードでどんな作業をしているか

実際に市場を見学した後に「気付いたことを混ぜての感想」ということで記述させた。資料4から、市場の様子を自分の予想と照らし合わせて記述する内容のものと、新たな発見について記述するものが多いことが分かる。その後の授業の中で、

「みんなが見つけたことは、何のための工夫なのか」について話し合った。児童からは「お客さんのため」という意見が出される中、「市場のほかの人とうまく協力できるようにするため」「個人のお客さんに売るスーパーとは違う工夫がたくさんあった」といった意見も出された。このことは、それまでの学習活動が、市場にはいろいろな種類の仕事があることを児童に強く印象づけていたことを裏付けている。さらに、この単元の目標である「いろいろな人の働きがあって生活が支えられている」という気持ちをもつための素地になるものと考えられる。

資料4

児童の記述について(抜粋)	
カード3	<ul style="list-style-type: none"> ・市場には思ったよりも多くの段ボール箱があった ・食品がどこからきたのかわかる黒板があった ・冷凍のまぐろを電動のこぎりで切っている人がいた ・市場には魚や花なども売られていた ・食品は品物ごとにまとめておいてあるが、バックではなくて段ボールに入っている物がほとんどだった ・スーパーに比べてバックヤードはとて広かった ・-15℃くらい大きな冷凍庫があって、食品を保存していた

資料5は、市場の学習を通してまとめ学習をした後に「市場でどんな仕事をしているかを学んだことで、どんなことが分かったか」についての記述内容である。主な感想はいろいろな仕事を工夫しながら行っているというものであるが、ほかにはカード3以後の授業によって児童は、協力しながら分担の仕事をするという価値やそれまでのスーパーの学習を想起し、ほかの仕事の人、買いに来る人のことも考えながらどうすればいいか工夫している、という記述も多かった。

資料5

児童の記述について(抜粋)	
カード4	<ul style="list-style-type: none"> ・スーパーとは違う工夫があった ・スーパーと同じ工夫もあった ・場所が広々としていろいろな機械が置いてあった ・売りに来る人や買いに来る人がわかりやすいような工夫があった ・すばやくお店に届ける工夫があった ・同じ種類の品物が大量に置いてあって、売るための作業をしていた

このようなことから、児童はポートフォリオを作成する中で「人と人とのつながりの中で、お客

さんのために仕事を工夫する」という気付きにまで考えを深められたと考える。また、そこにはカード1で行った、事後の授業で友達のいろいろな意見を共有し、改めて友達の考え(カード1)を振り返ったことが影響していると考えられる。この段階において、児童の意識が「実際には市場ではどんな仕事をしているのか」というところに向けられたので、その後の学習の視点がはっきりしたのではないか。その点においては、児童がカードを振り返る際に、児童の考えを類別するような教師の支援が効果的であったと考える。

②作成したポートフォリオを教室に掲示しておき、互いの内容のよさに目を向け伝え合う活動を取り入れることで、児童は友達の見方やとらえ方を広げることができたか(見通し2)

ア 実践の概要

教室背面に貼ったカードへ児童の気持ちを向けるために、友達の目の付け所に対するよさを発見する活動を行った。新しいカードを貼り出すたびに、朝の会や帰りの会の時間を利用して、短い時間で数名ずつを見るようにした。その際友達のカードを見る観点として、自分と同じ内容だったら「同じことが考えられていてうれしい」であるとか、自分が気付かなかったようなことが書かれていたら、それを素直に驚きとして認めるように促した。

友達への所感や付箋紙に書き、友達のカードの近くに貼らせるようにした。また、ほかの児童が貼った意見と同様の場合は、その児童の貼った付箋紙の近くに自分の名前を書くことで、よさに気付く機会を多くもたせるようにした。

ポートフォリオの掲示については、教室背面の下方に掲示することにより、児童の目の高さに合わせ、カードの記述内容を見やすくするように工夫した。

さらに、朝や帰りの会の時間を利用して、授業中での1回限りで見終えるのではなく、日常的に教室の後ろに集まり、目を向けられるような状況を作るように配慮した。

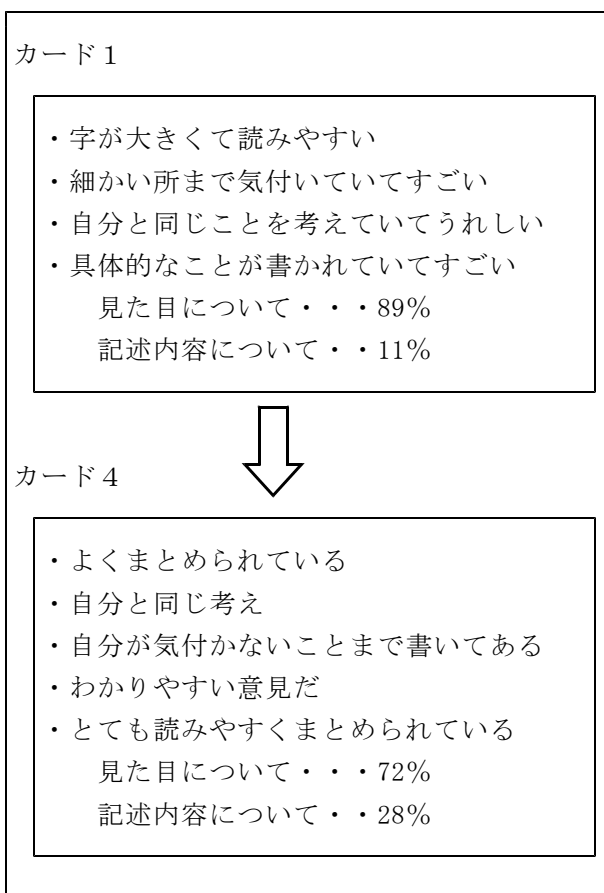
イ 結果と考察

抽出児童Aについては、友達へ伝えた内容が、初めは「とても読みやすい」という程度であったが、次第に「よいことに気付いている」のように変化し、さらに書くことに対して、自ら進んで何枚も書くようになるなど前向きになった。これは、

自分が友達からよさを伝えられたことにより自己肯定感が芽生え、友達のよさを伝えようとする気持ちが生まれたためと考える。この児童はカードを重ねるに従って、友達からより多くコメントをもらおうとカードの記述が具体的な内容に変化している。

また資料6のように、最初の頃は「字が大きくて見やすい」「字がきれい」といった記入の仕方についてのコメントが多くみられたため、道徳の授業を使い、友達のよさの見方を広げるために、どんな言葉をかけられるとうれしいかについて考えさせた。その中で児童からは「どんなことでもほめられるとうれしい」という意見に加え、「特に自分の考えをわかってもらえたり、ほめてもらうといい気持ちになる」という意見も出されたため、友達の考えをしっかりと聞いてよいところを見つけていこうというまとめをした。その結果、付箋紙への記入が「なるほどと思った」「わかりやすくまとめられている」などに変化し、気付きの内容についてのコメントを書く児童が増えた(資料7)。

資料6 付箋紙への記入の様子



児童たちによる付箋紙への記入内容や取組み、また児童Aの学習態度の変化から、友達のカード

を見たり、友達からコメントをもらったりすることで、児童たちはそれまでの友達の見方を広げることができた。その過程で、文字のような表面化されたよさだけでなく、書かれている内容や気付き等の内面のよさへ目を向けることができるようになり、さらにそれが自分の学習へも反映されるようになったと考える。

資料7 友達のポートフォリオにコメントを書く児童の様子



③単元の最後にそれまでに得た友達からの情報を整理したり、自分のポートフォリオの記述内容に目を向けることで、自分では気付かなかった自分らしさに気付くことができたか (見通し3)

ア 実践の概要

教室背面に掲示したポートフォリオについて振り返り、この単元のまとめをさせた。まとめの際には、以下の点について観点を与えた。振り返ってみての気付きや感想は、カードを貼った台紙の余白部分に書くこと、そして友達からもらった付箋紙は台紙の裏側に貼ることの2点から単元の学びの足跡を振り返り、学びの様子や自分のよいところを明確にさせた。

イ 結果と考察

自分の書いたカードを振り返ってみての気付きや感想では、最初は単に仕事の内容について書かれていただけであったが、次第に仕事をする上での工夫についての記述へと変化してきていることに気付き、「詳しく見られるようになった」という感想を持つ児童が多かった。また、それまでの学習と比べながら学習するようになったことのよさを記述する児童もみられた。抽出児童Aについては、どんどん書く内容がわかりやすくなったという感想を持った。その点は、抽出児童Aの中に、見通し2の実践から、より詳しく書こうという気持ちが生まれたためではないかと考えられる。こ

のことはほかの児童にもあてはまり、「読む人を意識しての記述」ができるようになった。

友達の意見を整理して感じたことについては、一番多かったことは「カードの書き方をほめてくれる子が多かった」であり、ていねいに書けば、みんなが読んでくれるという喜びを感じられたといえる。全員の児童が、友達からほめられる経験を持ったことで、自分のよくできることを認識することができた。

以上のことから、まず、自分のポートフォリオを振り返っての感想では、「できるようになったこと」を感じる児童が多いことが分かる。次に、友達のよさを認める活動を通しては、「自分がよくできたこと」「自分の長所」を感じるようになった。自分のポートフォリオを作成することと、友達のよさに目を向けることを同時に行ったことは、ポートフォリオの内容がよくなれば、友達から多くの意見がもらえ、次のカードの内容を更によくしようとする、という大きな効果につながった。

そして、自分のよさを認識するには、やはりほかの人からのコメントが大きく影響するということから、第三者とのかかわりは自己理解を促す上でも重要であると考えられる。

V 研究のまとめと課題

(担当指導主事 中西 信之)

1 研究のまとめ

児童の人間関係形成能力を育成するために、友達とのかかわりを利用して自分の学習の振り返り活動を取り入れたことは効果的であったと考えられる。その要因としては、第一に、友達とのかかわりの中で自分のよさを振り返られたことが挙げられる。友達の目から見たという点において、自分では意識していなかった点についてよさを指摘されることで、自分のよさを多面的に見られるようになったと考える。第二に、指導段階に応じたポートフォリオの振り返りが効果的であるという点が挙げられる。これにより児童の学習に対する知識や気付きの量が多くなり、カードの記入事項にも反映されたので、変化が分かりやすく、児童が学習を進める中で発見したことをはっきりと認識できるという点において効果があったと考えられる。その上、友達のよさを自分がみつけることで、友達の気付きなどにもふれることができ、そのことが、自分の見方や考え方を広げることにつ

ながったのではないかと考えられる。ただし、小学3年生という発達段階においては、友達の考えや気付きなど、内面のよさを見つけるところまで高めるには、本研究の実践と異なる手だてを講じる必要があるといえる。本研究の中でも道徳として、友達のよさの見方にふれる指導を行ったが、日常行われる授業の中で友達の意見を認めるような活動を多く取り入れることで、内面のよさを見つける素地を培うこと等も必要であると感じた。

2 今後の課題

この実践を通して、友達からのコメントの質によって自己理解の深さも変わるということも分かった。従って、本研究のような活動を計画的に実施して、経験を繰り返し積み重ねていくことで、友達に対するコメントの質を高めていく指導が必要である。また、友達のよさにも目を向ける活動を行っているので、そういった実践で培った自分に対する理解や友達に対する気付きを、ほかの学校生活の中でどのように発展させていくかということについて明らかにしていく必要も感じた。これらの活動を通して、人間関係を積極的に作っていくという実践的な態度の形成へとつなげていきたい。

Web探索キーワード

【進路指導 キャリア教育 人間関係形成能力
自己理解 ポートフォリオ】

<参考文献>

- ・群馬県教育研究所連盟編 著 『実践的研究の進め方』 東洋館出版社(2005)
- ・群馬県総合教育センター 編 『長期研修員研究報告書第 218集』 群馬県総合教育センター(2004)
- ・三村 隆男 著 『キャリア教育入門』 実業之日本社(2005)
- ・エズメ・グロワード 著 『教師と子どものポートフォリオ評価』 論創社(1999)
- ・エリザベス・F・ショア他 共著 『ポートフォリオガイド』 東洋館出版(2001)
- ・N. バーバー他 共著 『ポートフォリオをデザインする』 ミネルヴァ書房(2001)